

## 調査研究事業の趣旨（概要）

各地域における不登校の未然防止、初期対応、自立支援の取組のうち、学校の実情に応じた不登校の未然防止対策の充実に図るための教育委員会が果たすべき役割に関する調査研究

## 委託地域数

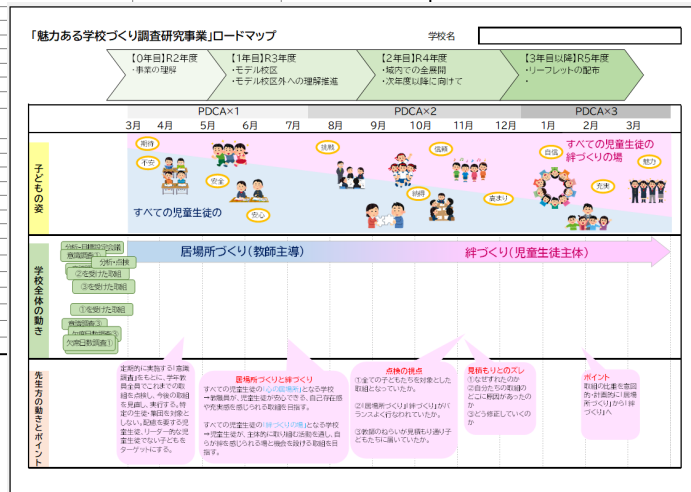
令和3年度：15地域・令和4年度：14地域

## 調査研究の主な成果

- ① PDCAサイクルに基づく生徒指導マネジメントを実行する観点から、組織的・計画的な不登校対策を実施するための「ロードマップ」様式等を開発

<作成した様式の例>

令和4年度「魅力ある学校づくり調査研究事業」研究計画		（ 都府県 市町 ）			
国研の動き		指定地域（ ）年度の取組			
		学校の動き			
		モデル校区の動き（計画）	モデル校区の動き（実際）	校区以外の動き（計画）	校区以外の動き（実際）
3月	下旬	モデル校区選定			
4月	下旬	調査研究委員会①(4/21)			
5月	下旬	調査研究委員会②(5/11)			
6月	下旬	調査研究委員会③(6/11)			
7月	下旬	調査研究委員会④(7/11)			
8月	下旬	調査研究委員会⑤(8/13)			
9月	下旬	調査研究委員会⑥(9/13)			
10月	下旬	調査研究委員会⑦(10/13)			
11月	下旬	調査研究委員会⑧(11/13)			
12月	下旬	調査研究委員会⑨(12/13)			
1月	下旬	調査研究委員会⑩(1/13)			
2月	下旬	調査研究委員会⑪(2/13)			
3月	下旬	調査研究委員会⑫(3/13)			



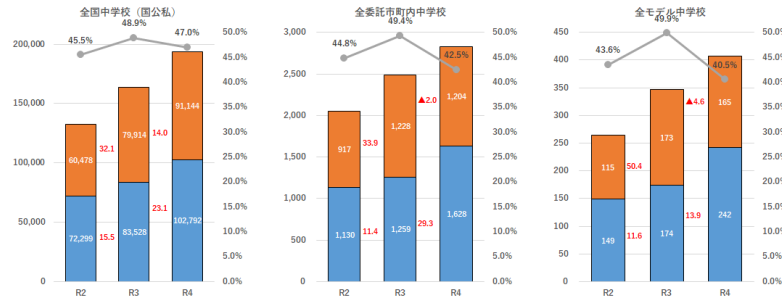
学校 第 学年 記入欄		「あてはまる」と回答した子供の割合			
		前3月	7月	12月	3月
点検	ア 学校が楽しい				
	イ みんなで遊べる場所が楽しい				
	ウ 授業は主体的に取り組んでいる				
エ 授業がよくわかる					
このため項目に○（1～2項目）		理由・理由（学年メモ）			
課題	ア 学校が楽しい				
	イ みんなで遊べる場所が楽しい				
	ウ 授業は主体的に取り組んでいる				
エ 授業がよくわかる					
このため項目に○（1～2項目）		学年メモ（学年メモ）			
目標	ア 学校が楽しい	1年後の目標には、10人はあてはまる人があてはまることを目指します。			
	イ みんなで遊べる場所が楽しい				
	ウ 授業は主体的に取り組んでいる				
エ 授業がよくわかる					
この様式の編成研究で得られた学校評価の継続的取組のポイントを整理して公開書として作成します。					
留意点	ア	同じ項目で学校が楽しいとするのが、学校評価で継続的取組が期待されています。			
	イ	アに比べてより一歩でこれら項目を達成する必要があるため、厳しめに評価してください。			
	ウ	楽しいと感じさせるのは、授業を中心とした取り組みが、最も期待されています。			
	エ	主体的な取組には、教師が積極的に取り組むことが、最も期待されています。			
	オ	同じ項目で継続的取組が期待されていますが、学年ごとに異なる項目を評価してください。			
ア以外の留意点を併せて記入可能な場合はイメージを参考にしてください。					
例	授業がよりわかるように授業内容を工夫し、その結果としてあてはまる割合が増えていくことを目指す。				
注	この様式は、この調査研究事業の成果として公開されます。				

## 調査研究の主な成果

### ② 不登校対策の目的の明確化、特に全ての児童生徒を対象とした「新たな不登校を生まない」対策を実施することの効果の提示

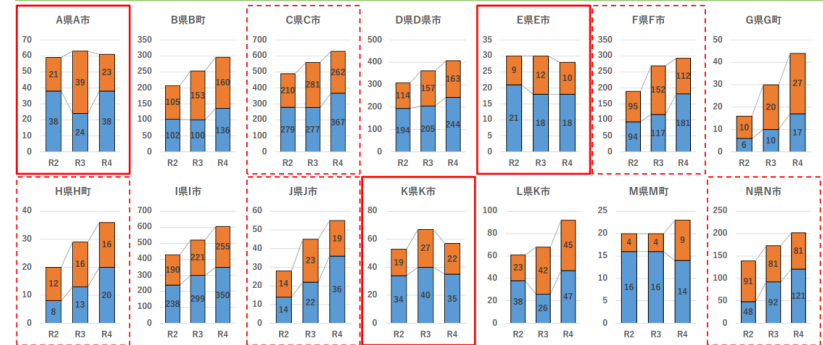
全国的に「年度内に新たに不登校になる児童生徒」が増加している中、「居場所づくり」「絆（きずな）づくり」を中心とした全ての児童生徒を対象とした未然防止の取組を進めた結果、「新たな不登校児童生徒」の出現を抑制し、学校単位だけでなく取り組んだ自治体単位で不登校生徒数の減少が見られた。

不登校生徒数の推移（全国・全委託市町内中学校・全モデル中学校）



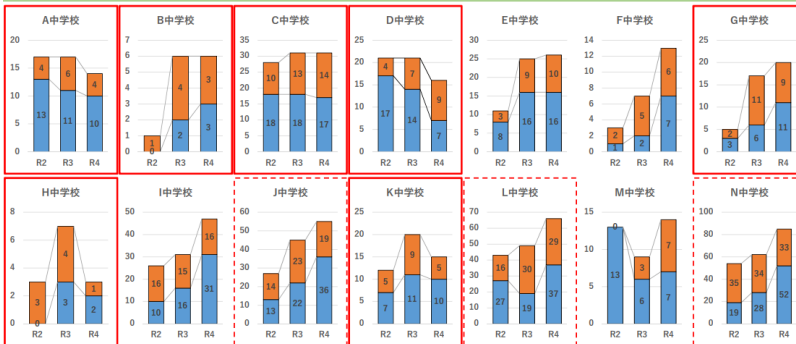
魅力事業の事業委託を行った2年間（R3～4）において、不登校生徒数は増加しているものの新規者数・新規割合は減少（全国以下）

不登校生徒数の推移（委託市町単位）



不登校生徒数を減少：3/14市町・新規者数を減少又は維持：7/14市町

不登校生徒数の推移（モデル校単位）



不登校生徒数を減少又は維持：7/14校・新規者数を減少又は維持：8/14校

効果的な取組に共通するもの

#### 中学校区全体での取組

- ✓ 推進委員会や主任者会議など域内共通理解の場の定期開催
- ✓ 小中合同研修会の開催（年複数回）によるベクトル合わせ
- ✓ 「引継ぎシート」の活用による実践内容の引き継ぎ
- ✓ 教育委員会の支援（場の設定・会議への定期参加・共通構想図）

➡ 9年間を見通した実践意識の醸成  
未然防止の取組への価値付け

#### 「児童生徒の意識調査」の活用

- ✓ 「PDCAシート」による点検・改善サイクルの確立
- ✓ 学年団体会等、教員が主体となった分析・計画立案
- ✓ 重点項目の設定（校内・校区）による取組の重点化
- ✓ 分析の視点（児童生徒と教職員の意識のズレの検討）の明確化
- ✓ 1人1台端末の活用等、Webアンケートによる効率化

➡ 児童生徒を中心とした教育活動  
PDCAサイクルの確立

#### すべての教育活動で「居場所づくり・絆づくり」を実践

- ✓ 自校の強み（「特別活動」など）の活用+授業改善

➡ 学習指導と生徒指導の一体化  
日常的な生徒指導の実践

= 「生徒指導提要（改訂版）」の趣旨と合致

## （例①）生徒の主体性を重視した行事（特別活動）改善（児童生徒中心の学校づくり）

意識調査「みんなで何かをするのは楽しい」が高いという自校の強みを生かし、文化祭、球技大会などのあらゆる学校行事や活動での居場所づくりと絆づくりを重視した取組

「居場所づくり」の例

- 合唱コンクールでの学級目標の設定
- 練習ルールづくり
- 役割の明確化
- 生活の記録を活用した振り返り
- 練習の様子 of 通信、HP等での発信
- 本日のMVP
- 苦手意識のある生徒と得意な子のペア練習

「絆づくり」の例

- パートリーダーを中心とした練習
- 合唱コンクールノートを作成し、全員で取り組む
- リーダー会の開催

- <効果>
- 生徒主体の取組による行事の活性化と業務改善
  - 友達の新たな一面の発見
  - 集団で取り組むことの良さと楽しさの実感
  - 自己有用感、自己肯定感の高まり
  - クラス、学校の一体感の醸成 など

## （例②）校則の見直し（児童生徒中心の学校づくり）

生徒会役員の公約「校則の見直しを行いたい」を発端とした取組

- 道徳の時間を活用したルールの大切さの学習
- 学級会での話し合い
- 学年パネルディスカッション、全校パネルディスカッションを通じた協議

- <効果>
- ルールに縛られるだけでなく、自らルールを守っていく意識の醸成
  - 同じ生徒でも様々な考え方があることなど、多様性を認め合う集団づくり など

## （例③）生徒指導の機能を生かした授業改善（学習指導と生徒指導の一体化）

授業に内在化した積極的な生徒指導を日常的に実践するための授業改善の取組

- 生徒指導の機能（現行『提要』では実践上の視点）を活かした授業づくりのための職員研修の実施
- 学習指導案の指導上の留意点に、生徒指導の視点を明記して授業を行うなど、学習指導と生徒指導の一体化を進める授業づくり 等

- <効果>
- 子供同士の教え合いや学び合いなど、学習指導要領が目指す「主体的・対話的・深い学び」のある授業の増加
  - 「授業がよく分かる」「授業に主体的に取り組んでいる」の回答割合の増加
  - 取組を通じた共感的な人間関係の促進と児童生徒一人一人の自己有用感、自己肯定感の向上 など

## （例④）学級活動の活性化と日常の教科指導の見直し（学習指導と生徒指導の一体化）

長年取り組んできた学級活動を中学校区すべての学校で行い、児童生徒の主体的に取り組む力を伸ばすとともに、ふだんの授業にも児童生徒の話し合う場を多く設定するなどの授業改善への取組

- ・ 「学級会の進め方」の見直しと共通化
- ・ ふだんの授業でも児童生徒が主体的に話し合う場面を意識的に取り入れた授業づくり

<効果> ➢ 自分たちの学校生活を自分たちの力でより良くしたいという意識（自治的能力）の向上  
➢ 「授業に主体的に取り組んでいる」「授業がよくわかる」と回答した児童生徒の増加 など

## （例⑤）教育課程の見直し（働き方改革と生徒指導の充実）

生徒と向き合うための学校改善の取組

- ・ 登下校時間の見直し
- ・ 月1回の「〇〇の日」（午後の部活なし完全下校、会議・研修もなし）

<効果> ➢ 始業前の教職員同士の情報交換の時間確保  
➢ 教職員の自発的な学び合い  
➢ 教職員、生徒ともに自己決定の場の提供による時間の有効活用の意識が向上  
➢ 自己指導能力の育成 など

## （例⑥）中学校区としての実践を行うための体制づくり（チーム学校の推進）

各校に「魅力」担当者を位置付け、オンライン会議システムも活用しながら定期的な協議の場を設定するなど、学校の枠を超えた取組

- ・ 「子どもの意識調査」の結果を持ち寄り、各校の課題だけでなく9年間を見通した中学校区としての課題を設定して実践
- ・ 小中学校の接続期を意識した「のりしろ」の取組による中1ギャップの解消
- ・ 児童生徒の学びの連続性、不安感へ配慮した小中共通の「学習のきまり」の見直し

<効果> ➢ PDCAサイクルによる生徒指導マネジメントの意識の高まりと取組方法の確立  
➢ 担当者を中心としたミドルアップダウンマネジメントによる職場の同僚性の高まり など

### まとめ

様々な実践を通じて、教職員の生徒指導に対する意識が変化（未然防止の重要性への理解）し、行事・授業等への取組方が変化した結果、学校が児童生徒にとって魅力的な場となったことで改善につながった。今後も早期発見、個別支援の充実を図るとともに、改訂版『生徒指導提要』で示された発達支持的生徒指導による未然防止の取組についても充実させていくことが生徒指導上の諸課題の解決のために必須。

# <参考>魅力事業（第Ⅳ期）の経過

年度	委託地域（地域数）		作成・公表した資料等
H28	A (8)	B (11)	教育委員会が各校の状況を把握するための欠席日数調査，個別状況調査様式の開発
H29		C (8)	PDCAサイクルの点検・見直しを効率的に行うためのPDCAシート，備忘録様式の作成
H30		D (11)	生徒指導リーフ22「不登校の数を継続数と新規数に分けて考える」作成
R元	*後半1月からコロナ禍		「欠席日数調査を不登校施策に生かすための指導主事向け資料」作成・活用
R2	*コロナ禍		小中連携に寄与する欠席児童追跡調査シート様式の開発
R3	*コロナ禍		
R4	*コロナ禍	G (7)	教育委員会が事業の進捗について計画、確認するためのロードマップ様式の開発
		H (8)	